

二月五日（日）

沙綾から一日早い誕生日祝いを受け、そのまま彼女を東京へ送り出して帰路に着くタイミングで、瑞希からのメッセージ。バイトが終わる一九時頃に太田のイオンタウンへ来い、と。

茨木で降りず、三宮総持寺駅で下車して、府道一二六号に沿って歩いていく。国道一七一号線の交差点に突き当たっても、横断歩道を渡り、そのままイオンタウンへ真っ直ぐ向かった。

瑞希はいつものスタバじゃなくて、中のサイゼリヤまで来い、先に中で待っていると送ってきた。言われた通りに、イオンの中の店舗へ足を踏み入れる。新規客の案内に出てきた店員を制し、先に通されているはずの瑞希を探す。

「一兄、こつちこつち」

先に僕を見つけた瑞希がソファから身を乗り出して、こちらに手を振った。その隣に誰がいる？ 瑞希の隣に座った男がこちらに振り返る。

「えっ？」

「あ、どうも。こんばんは」

武藤さんのところの学生くん、哲朗くんがそこにいた。なぜキミが、瑞希の隣に？

「ド派手な彼女さんは？」

「さつき、新大阪まで送ってきた。もうそろそろ、京都に着くんじゃないか？」

二人の向かいに座る。二人の前にはすでにドリンクバーだの、辛味チキンだの、軽い食事が並んでいる。近くまで来た店員さんにメニューをもらい、その場でグラスワインの赤を注文した。

哲朗くんに視線を置いたまま、目の前に置かれた水を口に含んだ。隣の瑞希が口を開いて、「哲朗さんにも、お祝いしてもらおうと思つて」と言った。

「お祝い？」

瑞希は横に置いた大きな包みを持ち、哲朗くんと共に差し出した。

「お誕生日、おめでとう」

「わざわざありがとうございます」と哲朗くんは付け加えた。とりあえずプレゼントを受け取り、

入れてきたらしい紙袋も渡してもらった。

「この間、エキスポシティで一緒に映画見て、一兄の誕生日プレゼント探しにも付き合ってもらって」

「僕もお世話になってるんで、この間のお礼も兼ねて、半分出させてもらいました」

哲朗くんの言い分は、半分くらい理解できる。その前提の瑞希の説明が飲み込めない。詳しい説明を訊きたかったのに、彼女は「ちよつとトイレ」と席を外した。哲朗くんは、気まずそうに身体を小さくして目線を逸らしている。

「なんか、成り行きでこういう感じに」

消え入りそうな声で「すみません……」と付け加えた。できるだけ落ち着いて聞こえるように、ゆつくりと訊く。

「いつから？」

「今月の一日から。やましいのは、一切ないです」

「ないんですけど」とまた下を向きながら呟いた。真相を追及しても仕方ない。自分を守るためにも、「良いお友達」でカッコに括ろう。

ちよつぱり気まずい沈黙の中、あつけらかなとした瑞希が楽しそうに戻ってくる。入れ替わる形で、哲朗くんがグラスを持ってドリンクバーの方へ向かう。瑞希は鼻歌を歌いながら、目の前のアイスコーヒーに口をつけた。僕はやっと出てきたワインを一口飲んだ。

「おお、哲朗くん」

入り口の方から、最近耳に馴染んできた人の声がする。哲朗と共にこちらにやってくるのは、ご家族を伴った武藤さん。

「あれ、浪川くん。もう哲朗くんと仲良くなったの？」

「ええ、まあ……」

瑞希は武藤さんの後ろにいた男性に、挨拶したらしい。武藤さんは瑞希と哲朗くんに注視しているが、店員に促されて自分たちの座席へ向かう。

「また今度、話聞かせて」

哲朗くんはさつきより一層気まずそうな雰囲気、ゆつくりと瑞希の隣に腰を下ろした。僕もどこことなくその空気に飲まれる形で、ちよつぱり沈んだ気持ちになる。僕らの落ち込みなんて微塵も感じていないらしい瑞希は、「次、何食べ？」とメニューを広げた。

初出 令和三年二月一九日 NOVEL DAYSにて公開